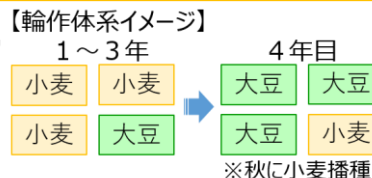


本宮市青田地区

1 想定するモデルとしての姿、モデルとする事項

- 大規模水稲栽培との組み合わせによる小麦、大豆の収量・品質の安定化
- 大豆、小麦の輪作体系（3年に1回程度ほ場を交換）の確立を図る。



2 生産概要（中心的な担い手の概要）

- 【作付面積】水稲：25ha、小麦：0.7ha、大豆：1.8ha（R3）
- 水稲大規模経営体のため、作付時期を拡大するため乾田直播に試験的に取り組んでいる。（現在：水稲は移植栽培と湛水直播を組み合わせている）
- 水稲の作付面積が徐々に拡大。（R3：25.0ha → R6：30.0ha）

3 取組のポイント（モデルとして構築する取組）

＜需要に応じた生産を徹底＞

- 実需者の要望を踏まえ令和3年に大豆の品種を「タチナガハ」から「里のほほえみ」に切り替えた。小麦の品種についても、「きぬあずま」から「さとのそら」への切り替えを検討している。

＜団地化し適期作業を徹底することで輪作体系の確立＞

- 水系別に水稲から大豆・小麦に転換し、団地化するエリアを検討中。
- 令和6年度は小麦「さとのそら」の実証ほを設置した。



図1 小麦「さとのそら」の実証ほ播種

4 取組成果

＜小麦の収量向上＞

- 小麦の適期播種によりR4年より単収が増加

＜小麦新品種「さとのそら」の普及拡大＞

- 小麦生産者に対してチラシを作成し栽培技術を周知

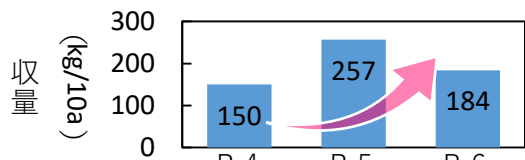


図2 小麦の収量の推移

＜大豆の作付面積向上＞

- 水稲の作付面積拡大に伴い、適期播種が困難となり大豆面積が減少傾向にあったが、R5年度に晩播狭畦密植栽培の実証ほを設置した結果、R6年度の大豆作付面積が向上

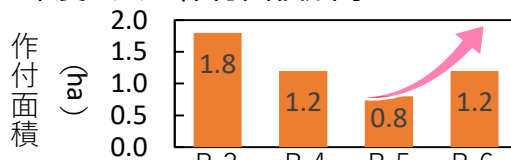


図3 大豆の作付面積の推移

5 課題（7年度のポイント）

＜大豆＞

- ドリルシーダーを活用した播種により耕耘2回を1回に削減し、適期播種を目指す。
- 難防除雑草（アレチウリ）対策として、効果の高い土壌処理剤の選択、適期のベンタゾン液剤処理の指導により、手取り除草回数の削減を目指す。
- 高温年の場合、額縁明きよを利用し灌水を指導し、収量の確保を目指す。

＜小麦＞

- 水稲の品種構成や収穫適期について指導し、引き続き小麦の適期播種を目指す。
- 小麦生産者に対し、「さとのそら」への作付転換を呼びかけ、「さとのそら」の面積拡大を図る。